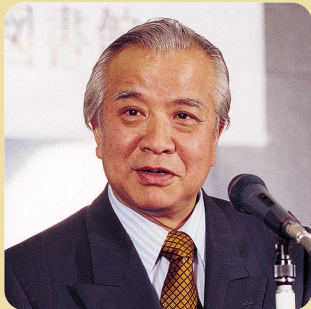




図書館法制定50周年記念 講演会&シンポジウム

宮城県図書館は平成12年11月3日、図書館法制定50周年を記念する講演会とシンポジウムを本館ホール養賢堂で開催しました。記念講演会の講師は作家の阿刀田高氏。阿刀田氏は「日本の図書館 過去から現在そして未来へ」をテーマに、図書館と読書の楽しみ方などについて講演しました。続くシンポジウムでは、阿刀田氏もパネリストとなって、「日本の図書館 21世紀への課題」について話し合いました。



▶▶ 記念講演会の部

図書館 過去から現在そして未来へ 読書の力とそれを支える図書館

講師 / 作家 阿刀田 高 氏

社会人としてのスタートは図書館司書

私の社会人としてのスタートは図書館員で、国立国会図書館に11年間勤めておりました。しかし、もう辞めてから30年ほど経っておりますし、しかも国立国会図書館は図書館としては極めて特異な図書館で、公共図書館とは大分性質が違っていています。ですから今日は小説家の立場から、図書館をどんなふうに見ているかについて、お話ししたいと思います。

「図書館」と聞いて、まず最初に思い浮かぶのは「読書」です。最近「読書離れ」「活字離れ」などよく言われますが、私にはどうしてそういうことが起きるのか、もうほとんど信じられない気持ちです。

何かを創造するときに読書は必ず役に立つ

読書ほどずばらしいことは他にそんなにありません。それはまず「安い」ということ。何かやろうとするとすべてお金がかかります。本も高いと言われますが、他のものに比べればずいぶん安いものです。そして、たったひとりで、誰にも迷惑をかけることなく、いつでもどこでも楽しむことができる。しかも、対象となるジャンルはありとあらゆるものにわたっていて、それも初級、中級から上級、奥義に至るまで、だいたいものは揃っているのです。こんな便利なものは他にそうあるものではありません。そういうものを捨てて何をいったい人生の喜びとするのか。私には、じっくり考えれば考えるほど「読書離れ」や「活字離れ」と言われていることが、信じられないのです。

読書というのは、寝転がって何かを読んで、のほほんと楽しむだけでもおもしろいですよね。それだけでも、私は相当な価値があると思いますが、特に自分で何か新しいことをクリエイティブしよう、創造しようと思ったときには、そこから一歩奥に入っていくなくてはなりません。そしてそのときに、過去から受け継がれてきた活字の文化というものが、必ず役立ってくれるのです。それは私ども小説家のような仕事でも、過去の遺産というものはずいぶん役に立っているのです。読書はそのくらい力を持っていますし、それを支えている一つの機関が図書館なのです。



図書館法50周年記念講演会・シンポジウム
宮城県図書館

石ノ森章太郎さんも大変な読書家だった

もう10年ほど前ですが、東京青山で劇画のプロを養成する講座を見に行ったことがありました。その講座のオリエンテーションで、塾長が最初に話したのは、「みなさん、本を読んでいますか」ということでした。劇画のプロを志す人たちは、どちらかという活字とはちょっと別のところに関心がある人たちで、「読書」の話に一瞬驚いたようでした。

しかし、塾長の話は実に説得力があったのです。劇画のプロを志す人たちなら、みんな絵を描くのは得意ですが、その人たちが自分の絵のうまさを武器にしてストーリーのある劇画を描いていこうとするときに、力になってくれるのは四千年の歴史を持つ活字の知識なのだ と、塾長の話はそういうことだったのです。『ベルサイユのばら』を描いた池田理代子さんも大変な読書家ですし、亡くなられた宮城県出身の石ノ森章太郎さんもそうでした。

芥川龍之介と『銭形平次捕物控』 そして『落語全集』が愛読書だった

ではどうしたら読書が好きになると言えば、それにはやはり、自分の身の丈にあった、できるだけ楽しいものを読んでいくことが、一番大切だろうと思います。

私の中学校から高校にかけての、一番の愛読書は芥川龍之介と野村胡堂（のむら・こどう）の『銭形平次捕物控』、それに『落語全集』の3つでした。これはもう、すっかりと精読しました。



考えてみると、私の短編は芥川龍之介の作風と少し似ているかもしれませんが、私もしれませんし、『銭形平次捕物控』は間違いなく推理小説なのですが、私も推理小説を書きます。そして私の小説は、最後のところでどんでん返しがあるのですが、これは落語のオチと同じわけです。

中学、高校で一生懸命読んだ3つの愛読書は、その時は楽しいと思って読んでいただけなのですが、これが今でも、結構役に立っているわけです。

朗読の価値が見直されている

最近、「朗読」の価値が見直されて来つつあるように感じています。その一つが、目の不自由な方のための、いわば「耳からの読書」です。この宮城県図書館にも朗読サービス室があって、目の不自由な方に対面朗読をしているとお聞きしましたが、実は私の家内も日本点字図書館（東京都新宿区）で10年来、朗読奉仕員をしています。最近では、点字図書よりも朗読テープの需要が高まっているようです。

もう一つは「母親の朗読」です。テレビではお母さんよりずっと上手な人が朗読して、子どもたちにお話を聞かせる番組もありますが、子どもたちにとって、お母さんが自分のために読んでくれる物語は、読み方は下手でもそれはもう専属ですから特別な価値があるわけです。

それから「舞台朗読」、つまり舞台に立って朗読する試みも、いろいろな方が少しずつ始めております。一つの作品を芸として、ちゃんと読めるようになるには3ヶ月、6ヶ月という期間が必要なのですが、それはやってもおもしろいし、聞いても楽しいことです。

読書の大敵と公共図書館の課題

ところで、読書にも大敵があります。それは年を取ると目が弱くなるということです。そのときこそ、耳からの読書が登場すべきなのですが、そこには、いくつかの障害があります。その一つは著作権の問題です。一般の方が何の著作権料も払わずにどんどんテープをダビングしてしまうことなど、やろうと思えば実際、実に簡単なことなのですから。

それからもう一つは、高齢になると、たしかに耳からの読書の方が便利なので、それで健常者にもどんどん朗読テープの利用が広がっていきます。そうすると目の不自由な方が逆に阻害されてしまうことにもなりかねません。

こうした著作権の問題や、目の不自由な方と健常者の利用の関係なども、公共図書館における21世紀の課題として考えていくべきことだと思っています。

（記事は講演要旨。文責 / 宮城県図書館）

阿刀田氏夫人・慶子さんが『あやかしの声』を朗読

この日は阿刀田高氏夫人・慶子さんの朗読も行われました。慶子さんが朗読したのは阿刀田氏の短編小説『あやかしの声』（新潮社 1996年）。この作品



は阿刀田氏の国立国会図書館司書時代の経験をもとにして書かれたものと言います。ある財団に勤務する主人公が国際会議出席のために図書館発祥の地、アレクサンドリア（エジプト）を訪れ、そこで見た夢と、日本の大学図書館で働く妻の幻聴が交錯するというストーリーです。慶子さんは1990年から日本点字図書館（東京都新宿区）で朗読員をつとめ、目の不自由な方のために、録音図書の制作などに携わっています。

阿刀田 高氏の 著作ミニギャラリー



『ナポレオン狂』

（講談社 1979年）

直木賞受賞作品。ナポレオンに魅せられ、ナポレオン関係のものなら何でも集める男と、自分はナポレオンの生まれ変わりだと信じている男が出会う物語のほか、日本推理作家協会賞を受賞した「来訪者」など11の作品が収められている。



『新トロイア物語』

（講談社 1994年）

吉川英治文学賞受賞作品。古代ギリシアの詩人ホメロスの叙事詩『イリアス』などにも描かれたトロイア戦争を、阿刀田流の解釈で現代にも通じる小説として再構築した長編歴史小説。



『まじめ半分』

（角川書店 1984年）

国立国会図書館に勤めていた頃を振り返る「図書館員の頃」、母方の先祖が仕えたという伊達家ゆかりの青根温泉（宮城県川崎町）を旅したときの「ご先祖様の湯」、今回のシンポジウムでも紹介された「読書保険」などを収録したエッセイ集。



『怪談』

（幻冬舎 1998年）

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の世界にひかれる2人の男女が、八雲の足跡をたどって焼津、犬山、松江、そしてマルチニク島へと旅し、互いの愛を確かめていく恋愛小説。八雲の作品や恐怖譚（たん）もちりばめられている。



『鈍色の歳時記』

（文藝春秋 1999年）

冬日和、豆撒き、黄水仙、父の日、待宵、秋出水、年の瀬など、12の季節で紡いだ短編集。季節の移ろいのなかで営まれる、穏やかな日々暮らしに織り込まれた少し不思議で少し怖い物語。



『シェイクスピアを楽しむために』

（新潮社 2000年）

「ハムレット」「ロミオとジュリエット」「リア王」など11のシェイクスピア劇を取り上げ、その時代背景や登場人物などを紹介しながら、劇作家シェイクスピアの「本意」や「技」まで読み解いた、阿刀田式のシェイクスピア案内書。